

社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

2010/12/1 No.55

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

望みの門
Mochi no Mon



(株)UCA・都市・

建築設計事務所

代表取締役所長

宇野 武夫

特別養護老人ホーム望みの門紫苑荘東側に望みの門有料老人ホーム「望みの門ハイム」が、現在、伊東建設興業(株)の施工により年内の竣工に向け工事が進んでおります。その建築概要についてご紹介したいと思います。構造は木造二階建て準耐火構造、延床面積五四四㎡(一六四・五坪)定員一人。一階は、キッチン、トイレ付個室、介護浴室、食堂、事務室等です。二階にはキッチン、バストイレ付個室と夫婦室等があります。特別な設備としてホームエレベーター、近年話題の水道直結式スプリンクラー設備等を設けています。

コンセプトは、この地域の街並みと調和をし、入居者が安心して生活のできる住まいづくりです。具体的には、港に向かう道路に平行に配置した壁面の出窓より行灯のような光を夜間道路に点在させ入居者の生活の様子がわかる建築としています。又、前庭を囲む形で居室を配置した大きな円弧の平面形を採用し、バザー等多くの市民が参加するイベント広場の背面の建築としています。内部空間は、

廊下の出窓前に小さなくぼみの空間を設け、入居者間の交流や、接客、談話等の場と考えています。居室は基準スペースを確保した変化のある空間で、ベランダ側の外側に視覚的な広がりをもたせた平面形としています。中庭側の屋根は直線の集合で曲面のような特徴的な屋根面を作りだし、反対側の東南に面した屋根には、補助を受けた二〇kwの太陽光発電パネルが設置され、玄関ホール壁面に現在の発電量がわかる電光パネルがかけられています。

話が変わりますが、計画当初に設計者として考えることはその土地の環境と歴史です。当法人の歴史は、戦後ドイツMBKミッションより派遣された二人の婦人宣教師により始められたと伺っております。建築の世界ではドイツに学ぶことが多く私も好きな国です。まず、建築の勉強を始めて目にするのは世界の建築や美術界に大きな影響を与えたバウハウスです。日本建築の美しさを日本人に再認識させてくれたのがドイツ人建築家のブルーノ・タウトです。ドイツ人の合理性を身体を通して私に感じさせるのがBMWです。BMWは高額な車ですが、ドイツに留学する時間もお金も無い私には仕事の道具として運転すること、私の脳がドイツの設計者の合理的な設計思想を感じるであろうと勝手に期待をして二〇年近く乗っています。ドイツには四〇年程前にユネスコの若手建築家研修でフランクフルトやハイデルベルクを訪問して以来四、五回訪問しています。昨年は千葉県

建築家協会の研修旅行を途中抜けだしMBKのあるベーテルの街を歩きドイツの開かれた福祉の街を感じ、改めて富津の地で半世紀近くに及ぶドーラ先生を中心とした望み会の福祉活動の歴史に深く感動しました。そこに今回新たに望みの門ハイムが加わります。建築家としてのこのような機会を与えていただいた神さま、のぞみ会関係者に感謝をいたします。(当法人顧問)

ドイツ研修

養護老人ホーム 望みの門楽生園

日独交流研修を終えて

生活相談員 松田 一史

成田を八月二六日出発し、約一二時間後にフランクフルト空港に到着しました。

最初の一週間はケルン、ボン、ベルリンを観光しました。

ケルンの大聖堂は垂直の線を強調する先のとがったアーチと高くのびる尖塔を備えたゴシック様式の教会です。高さは一五七m天を突くような迫力で圧倒されました。

ベルリンでは、ドイツが東西に分断された事により家族や恋人と生き別れになったり、壁を越えようとして命を落とされたり、多くの人の心に癒えない傷を残していることを知りました。

MBK青年の家にて三〇周年記念パーティーと式典に出席しました。

パーティーには六〇名程が集まり、昼間は

ゲーム、夜はイッテンバというダンスグループの公演を観ました。

パーティーの時、パン食い競争を教えみんなに楽しんで頂きました。

シェーア先生と合流し、MBKの活動目的と青年の家の話しを聞きました。

MBKの活動目的とは、「知識は頭で覚えていてもいつかは忘れてしまうので、心・体で覚えた楽しい事は忘れない。その楽しさがあるからこそ、自らで何かをしようとする意欲に繋がる。」それがMBKの活動目的であり、青年の家はMBKを支えている人が交流するために造られたとの事でした。

式典はMBKの活動を応援してくれている教会関係や政治家の方々や牧師、創設時より献金をしてくれている方々が多勢集まり進められました。

実習先のリンデンホフホテルは、障害(虐待、てんかん、学習障害、身寄りのない人)を持った人が、

健常者と一緒に働くことにより

社会性を身につけ就職できるようにトレーニングをする場所です。実習内容は

サービスクー

ム、掃除チー

ムに分かれていま

した。

ケルン大聖堂の展望



ケルン大聖堂の展望

私は掃除チームで実習をさせて頂きました。掃除の合間にショウトブレイクが入り、休憩所では健常者や障害者も関係無く一緒に話をし、笑ったり、ふざけあったりしている姿を見た時、私は今までこのような場に遭遇したことはありませんでした。

ドイツには教会が多くあり、ドイツの人は思考、行動、全てにおいてキリスト教が心の支えになっており、信仰心が強い国だと感じた。ドイツの人は、キリストの教え「隣人を愛す心」の理念を子供の時から教わり育っているので万人に心を広く温かく接する事ができるのだと思いました。

ドイツの歴史や福祉に触れたことは、よい経験になりました。これからは、何事にも問題意識をもち前向きに捉えながら、のぞみ会で仕事を頑張っていきたいと思っています。

児童養護施設 望みの門かずさの里

「ドイツ研修を終えて」

児童指導員 小池 定直

私はドイツに研修に来させて頂いて、多くの経験をさせて頂いた事を感謝しております。異国の地でシェーア氏をはじめMBKの職員の方々、法人や職場、家族、沢山の人の支えと尽力により一ヶ月の研修を無事に終える事が出来ました。自身の研修目的でもあった多くの方達との係わりがあったからこそ実りある研修となりました。この一ヶ月間の研修を通じ、ドイツの歴史や文化、福祉を学んできましたが、そこには日々関わった

人々への感謝と同時に、改めて自身の母国「日本」の歴史や文化を学び、それらを後世（子ども達）に伝えていかなくてはいけないと痛感致しました。

ドイツでは自身の犯した罪（ユダヤ人虐殺など）をきちんと認め反省し、それらを目に見える形として残し、その中で前を向いて進んでいる姿勢、また自身の国の歴史を老いても若きも学んでいる中で、日本ではどうだろうか。

自身の被害だけ（原爆投下）を後世に残し、自身の犯した罪（朝鮮人や韓国人虐殺など）は認めていない現実があるのではないだろうか。

教科書にも載せなければ、誰も語ろうとはしない。だからこそ日本人として自身の国の文化や歴史を知り、戦後日本を復興した高齢者への思いやりと同時に、自身が橋渡しとなり、子ども達が文化、歴史を学べる環境、また高齢者と子どもたちがお互いに手を取り合い、交流を深められる場の提供、必要性を感じています。

今日日本が抱えている問題は多数あります



が、一番考えなくてはいけない事は、人種や言葉の違いはあるものの、「互いを思いやる、助ける、許し合う事」ではないだろうか。

自身の語学力の無さから沢山の支え、助けを頂き、本来全ての人が心の中に持ち合わせている優しさ、温かさを身にしみて感じられた一ヶ月でありました。

制度や資金等無くてはならない資源も必要ですが、人が共存していく上で最も必要なのは「思いやり」であると私は思います。

この研修に参加出来た事は人生の中において貴重な経験となり、今後の働きの大きな糧となりました。

「人は一人では生きられず、誰かの助けが必要である。」

この事を常に心の中に持ち、日々の支援を行っていきたいと思います。

本当にありがとうございました。

望みの門福祉学校

ホームヘルパー2級養成講座

校長 佐野 毅

今年度も九月より約三ヶ月間「ホームヘルパー2級養成講座」を開講しました。

今年度は、受講者一五名の参加を得ましたが、今までになく男性受講者の参加が多く目立ちました。

今、我が国は「超高齢社会」を迎え、出生率の低下と相まってこれから年々人口が減少していくと共に、六五以上の高齢者が急速に増加していくと言われています。まさに「介

護」の問題は、社会全体で解決すべき緊急的な課題であると感じています。

望みの門では、地元富津市役所から委託を受けて「介護予防事業」を積極的に実施しています。「在宅介護」（ホームヘルパー）の存在は、「いつまでもお元気で」を支えるしくみとして、今後ますます重要になってきます。

望みの門の専属ケアマネージャーの調査に依りますと、富津地区では「ひとり暮らしのお年寄り」が増加傾向にあり、特に「日中独居」といって、昼間の間家族が全員仕事や学校に行ってしまう、お年寄りだけかボツンと家に残り残されてしまう、というご家庭が増えているとのことでした。併せて「認知症」を発症されたお年寄りの介護でお悩みのご家族からの介護相談も増えている、とのことでした。望みの門では、今後ますます増えていくであろう「在宅介護」の問題に対して積極的に取り組んでいきたいと思っています。高齢になっても「安心で安全な暮らし」を支えるために、在宅介護の担い手としての「ホームヘルパー」養成事業を通じて、地域福祉の発展に寄与する所存です。



東京望みの門 マナの家

ドイツの「女性の家」をたずねて

指導員 長崎 淑子

今年の夏ドイツを旅した折にデュースブルグにお住まいのヘットカンフ先生をお訪ねし、先生のアパートの隣にある「女性の家」(母子のシェルター)に泊めて頂くという貴重な経験をさせていただきました。

この「女性の家」の外観は三階建ての普通のアパートで通りに面しており、ベランダから子どもが外を眺めて手を振っていたりするのを見て、DV被害者が暮すのに危険はないのだろうかとか少々心配になりましたが、入り口はしっかり施錠されていて中から開けてもらわない限りは入れない仕組みになっていました。その時一〇人の女性たちがそれぞれ子どもたちと入所されていました。が殆どの人が生活保護世帯で、貧困と無学が共通の要因と語られたスツ

タフの言葉が心に残りました。入所者は部屋代(一日九ユーロくらい)

を払い、そこで自炊をするなど自立的に暮しながら、平均三ヶ月くらいの間に仕事と住まいを見つけて退所されていくという



ことでした。もちろん二三日で出て行く人もいるとのこと、それは日本においても事情は同じことだと思えます。あいにく施設長さんは入院中だったためお会いできませんでしたが、スタッフの方々からお話を伺い沢山の学びをさせていただくことができた感謝しています。宿直はなく、仕事は役割分担されていて事務(運営)に携わる人が一人、ソーシャルワーカーが一人、子どもを担当する人が二人おられました。

羨ましいと思ったのは、建物の中庭が広く、子どもたちが充分に遊べるスペースと遊具があり、専任の職員がケアする幼稚園があることです。母子で逃げて来、心身ともに傷つき疲れ果てたお母さんにとって、安心して子どもを遊ばせておける場所があるということはどうなるにか助かるに違いありませんし、子どもたちにとっても慰められ癒される回復の時間を過ごすことが出来るでしょう。東京望みの門の緊急一時保護のシステムとは少し違いますが、一人一人がしっかりと自立していきけるように援助する気持ちは同じだと感じました。

婦人保護施設 望みの門学園

受容と共感

園長 田尻 隆

先日ある幼稚園の運動会に行きました。最終競技の紅白リレーでは周りの大人たちの熱気が伝わったのか、子どもたちは目の色を変えて走っていました。ゴール後、負けてし

まった組のアンカーの子どもは、せきを切ったように涙があふれ出ています。その様子を横で静かに見つめ肩を抱いていた先生も我慢しきれなくなったのか、泣き出してしまいました。悲しんでいる子どもを懸命に受容していたのですが、それがついに共感

に変わった瞬間でした。紅白リレーのアンカーという大役を務めながら、チームの敗因を一人で背負ったかのようにして小さな胸を痛めている子どもにとって、そばで一緒に悲しんでくれる人がいるという体験はおそらく一生の宝物となることでしょう。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」(ローマ二・一五)人に与えられた受容と共感の力に出会えた日となりました。

今年もクリスマスが近づいてきました。学園では「まきびとひつじを」を手話で賛美しようとして毎日練習を重ねています。二〇〇〇年前のベツレヘム、神さまのひとり子を宿した身重のマリアとヨセフの二人は実に心細く孤独で不安な旅を続けていました。けれどもそんな二人を受容し共感する人たちが現れます。どこの宿屋も満室で泊る所のない二人に馬小屋を提供する宿屋の主人もその一人でした。



共に喜ぶ

「おなかの大きな奥さんが一緒にさぞお困りでしょう。あいにく、うちの宿屋も満室なのです。そうそう馬小屋なら丁度今日、干し草を入れ替えてきれいにしたところなのですが、感染症対策のために人を泊めてはいけない規則になっています。それに定員以上のお客さんを泊めるのは消防法で禁止されているのです。」こう言って二人のことを断ったところで、ひどい宿屋だと非難されることはないでしょう。なぜならこの主人は社会のルールに従い正しいこと言っているからです。けれども社会のルールに従い正しいこと言ってしまうえば、今晚二人の泊るところは見つかりません。

宿屋の主人の保健所や消防署による指導？のリスクもいとわない受容の精神によって、救い主は無事飼い葉おけの中に誕生しました。そしてこの救い主の誕生の喜びを共感するべく、遠くから博士や羊飼いらが集まってきます。この受容と共感の輪は時代を超えて広がりが続け、今もクリスマスは世界中の人々の間で特別な日とされています。今年のクリスマスも多に喜びを分かち合いたいものです。

クリスマス準備中

養護老人ホーム 望みの門 楽生園

施設長 白鳥 正道

今年も十一月を過ぎたあたりから、TVではクリスマスを取り上げたニュースが聞かれるようになってきました。楽生園でもクリ

スマスは一番力の入る特別な行事です。

楽生園ではクリスマスのたびに、有志による降誕劇を発表しています。約一か月間の練習です。毎年やっていてもその年その年で随分雰囲気の違いものになります。毎年新しい役に挑戦される方、まるで変更できないかのように毎年同じ役に手を挙げる方。思い思いに降誕劇に関わりを持ってくださいます。

「神はその独り子をおあたえになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである。」

(ヨハネ三章一六節)

イエスキリストは、十字架にかけられるためにこの世に遣わされました。神の子の死によってのみ人を含む万物が減びることなく天の国にはいることができるためです。

現代社会では戦争や事件、事故で毎年多くの死者を出しています。

「神はご自分にかたどって人を創造された。」

創世記一章二七節

個人的には人間は失敗作ではないかと感じる場合があります。なぜこうも不完全な存在なのかと。失敗や過ちを繰り返す。もう少し気のきいた存在があったのではないかと思います。

しかしこの不完全な人間を受入れ、救うためにご自身の御子を十字架に送りました。それほどにこの世を愛されたと。アブラハムもイサクを神にささげる決断をしました。他人のために自分の子を犠牲にする親がいるのでしょうか。自分が犠牲になっても子を守ると

考えるのが一般的ではないかと思えます。クリスマスは人間が減びないために送られた献げ物としてのイエスの誕生をお祝いする日です。「クリスマスおめでとう」と神様からのプレゼントを喜びながら、しかし、私たちの救いのためにイエスがこの世に使わされたことを今年も少し自分の中で整理しつつ、しかし偉大な神の業に厳肅な気持ちでクリスマスを迎えたいと思います。

冬を迎えて



健康管理室長 長谷川容子

暑く長かった夏が嘘のように短い秋が過ぎ、寒い冬がやって来ようとしています。今年の冬は厳しいとも言われています。

昨年の今頃は、巷で新型インフルエンザが流行し、いろいろな勉強会に出席したり、数が足りないと言われたワクチンや治療薬のうわさに一喜一憂したことを覚えています。それでも、望みの門の入所者及び職員が新型インフルエンザのワクチンを接種することができたものの、各施設に持ち込まれないようにと気を使いハラハラしたものでした。

昨年の新型インフルエンザワクチンは季節性のものに混合され、今年一度に接種することができました。新たなウィルスは流行しておりません。このまま、静かに流れて欲しいと願うばかりです。

この季節は、インフルエンザをはじめ、ノロウイルス感染等の感染症が蔓延しやすい時

期でもあります。望みの門には乳幼児から高齢者までの利用者さんがたくさん生活されているので、罹患すると脱水症等により、命に関わる問題になりかねないため、感染症予防は重要な問題です。感染予防はうがい・手洗いが原則ですが、それもままならないのが現状です。

さて、今年度の初めに、厚生労働省医政局長より高齢化及び重度化する特別養護老人ホームの利用者の安全な生活を守るために『医療安全が確保されるような一定の条件が満たされれば、特別養護老人ホームの介護職員による痰の吸引等を許容する』旨が示されました。その一定の条件の一つとして『施設内で一定の指導を受けた看護師が研修、指導等を行う等により、看護職員及び実施にあたる介護職員が必要な知識・技術に関する研修をうけていること』が挙げられています。この条件を満たすために、今後は施設長をリーダーとして各職種のスタッフが協力して、利用者さんの安全のために研修を進める必要があります。また、同時に利用者及びご家族の理解を得ることが重要になってきます。

このような課題をたくさん抱えながらも、今年も残りわずかとなりました。

今年一年、無事に過ごせたことに感謝し、利用者・職員が皆元気に楽しく、クリスマスそして、新年を迎えられますように。



老人デイサービス事業 望みの門デイサービスセンター アクティビティーの今と未来

介護員 田巻 亮

デイサービスセンターにおけるアクティビティーとして、身体を動かすレクリエーションやセンター内の掲示物の創作等、色々な事を実施している中、最近変わってきた点がある事に気付きました。それは毎月一回行っているお楽しみ行事なのですが…。

私自身の考えではデイサービスを利用している方々は「なかなか外出が出来ない」「色々な所に行ってみたい」と思っているであろうと感じていました。現に利用者との日常会話の中で『今度はどこに行くの？どうせなら美味しい物が食べたいわ』等の会話が頻繁に行われていました。

しかし実際に外出行事を企画してみると参加者が増えず、何が悪いと考え次の回の外出行事を計画してみても、やはり参加者は思ったよりも増えず…。



敬老会職員出し物風景

逆に利用者が増えている行事もある。それは室内行事。主に納涼会や敬老会といった、職員やボランティアさんの芸や出し物を観て楽しむ行事には、ほぼ毎回定員オーバーとなる位の参加希望が来ています。

室内行事にいつも参加している利用者数人に「外出行事にも参加してみませんか？」と聞いたところ「出掛けたいけど大変」「特に行きたい所が無い」「買いたい物が無い」といった意見がほとんどでした。

利用者の事を考え計画していた行事は、実際のところ利用者の意見とは少し違う所で行われていたのだなと感じた。確かに介護的には低く、自立度も高いデイサービスの利用者であるが、迷惑を掛けてはいけない、何かあったらどうしよう等の不安をいっぱい持っていたようです。

今後のデイサービスの課題として、更なる利用者との会話、その会話の中からどんな事に不安を感じそれを安心に変えていくか。その積み重ねが利用者の笑顔に変わり、サービス内容の向上、利用者の増加に繋がっていくものと考えています。

知的障害者通所授産施設 望みの門新生舎 「海外研修に参加しよう」

施設長 三橋 信康

去る九月二五日から十月二日までの間、平成二二年度ソウエルクラブ海外研修（Aコース・障害福祉）に参加してきました。

今回の海外研修ではアメリカとカナダの四

つの福祉施設を視察させて頂きました。なかでもカナダ・バンクーバーでの視察先であったバンクーバー・リソーシズ・ソサエティでの研修が今でも強く印象に残っています。バンクーバー・リソーシズ・ソサエティは一九七二年に設立され、グループホームとアパートを合わせて二〇カ所の住宅で一七〇名の障害者に住まいの場を提供しており、視察したホームは民間アパートを買い上げ、障害者に住居の供給だけでなく自立支援プログラムを持ち生活支援も行い二四時間体制で支援しているとの説明を受けたのです。我が国のグループホームは、施設福祉から地域福祉の流れの中、一九八九年に知的障害者地域生活援助事業として制度化され、現在各地で障害のある方たちの地域での生活の場として欠かすことが出来ない施策となっており、年を追うごとに設置数も増大している現状にあります。それに先駆けること十七年前にカナダでは既にグループホームやアパートを供給し、自立支援プログラムを提供する機関が設立されていたことです。カナダの障害者福



カルフォルニア大学パークレー校

祉の取り組みが日本と比べると格段に進んでいるように感じられました。

また、そのホームを利用して四年が経過するポールさんが外国から来た私たちを自室に招き入れて下さり、そこで貴重なお話が伺えたことです。

これまでにポールさんは「施設での暮らし」、「グループホームでの暮らし」、「アパートでの暮らし」を十二年間送ってこられたそうです。その生活体験から、施設・グループホームでの生活は監獄のようであったこと、現在のアパートの暮らしでやっと自由と尊厳が守られ自分にとっての家となり、コミュニティのなかでの生活が保障されたとのことでした。実感がこもり非常に重たい言葉として受け止めました。カナダの福祉事情はよくわかりませんが障害者権利条約が拠りどころとなっているのでしょうか。日本でも入所型の施設の是非が問われている昨今、障害福祉に携わる者として何かハッとさせられるものを感じたのは私だけでしょうか。また反面、今即座に入所型の施設が無くなってしまったらどうなるかも改めて考えさせられました。地域移行か施設かを問うより様々な障害に対応する福祉サービス（あまり好きな言葉ではないのですが）の選択肢をどれだけ基盤整備出来るか、そのなかで入所型のサービスが必要とされるのであれば機能として充分ニーズに応えていけるものとなるのではないのでしょうか。私たちを前に持論を展開する彼に心から盛大なる拍手を送るとともに今後の活躍をお

祈りたいと思います。どうもありがとうございました。

折しも日本では障害者自立支援法の廃止が決定され、新法である障がい者総合福祉法の制定に向けて議論が行われています。福祉の急激な変化は各方面に大きな軋みを与えることは障害者自立支援法の下ではっきりと示されたところです。自立支援法の轍を踏まぬように「私たち抜きに私たちのことを決めるな」という当事者の思いを真摯に受け止め、より良い新法となることを望みます。

最後に、今回の研修で視察もすることながら各地から参加された皆さんと数日間を共に過ごし、互いの現状と今後について語り合えたことは私にとって大きな成果となりました。この研修を終えた後も互いに連絡を取り合いながら障害者福祉の向上に向けて取り組んでいければと考えます。

「一体型共同生活介護事業 グレースホーム

「世話人研修」に参加して

世話人 浅井 造

去る一〇月二八日、君津健康福祉センターにて世話人研修会が行われ、参加させて頂きました。今回は消防法の改正が行われたこともあり、「災害に備える」ということがテーマでした。

まず、始めに君津市消防署員から共同生活住居において「災害に備える」ためには、普段の生活の中でどのようなことをしておくべきなのか？人命の保護を優先するための火災予

防や避難訓練なども大切ですが、まず地震等の大規模な災害に備え、食料や飲料水などの備蓄をしておくこと。また、不幸にも被災した場合の対応なども考えておかななくてはならないとの話がありました。引き続き、研修に参加した四〇数名の世話人が六班に分かれグループワーク方式で、「災害予防のための現状や課題」について話し合いを行いました。過去にグループホームで火災が発生しており、尊い命が失われていることから参加した世話人は皆、身近な自分の問題として考えていることが伝わってきました。

この度の消防法改正のなかで、障害程度区分四以上の利用者が、入居者の八割を越えている障害の重い人たちのグループホームについては、消防法施行令別表第一(六)項口に該当することとなり、スプリンクラー等の防火設備の設置が義務づけられることとなりました。

グループホームは、障害のある人たちの普通の暮らしの実現という願いから、全国各地に増えてきています。そこの暮らしは、地域の人たちと関わりあいながらの生活であり、特別な場所ではないと思います。今回の消防法改正が、新たに開設しようとするグループホームの重荷になっているのも現状です。命を守ることは非常に大切なことですが、日常的に火災をいち早く発見できる対策を講じることが必要であり、障害者グループホームだけの問題ではないような気がします。スプリンクラー・自動火災報知設備・火災通報

装置の整備もさることながら、夜間も含めた現状のグループホーム職員配置基準の見直しが優先されるべきであると感じました。このように、いろいろなことを考えさせられる研修でした。今後も、利用者の安全で快適な暮らしが提供できるように、努力していきたいと思っています。

地域活動支援センター 望みの門ヨカデイサービスセンター

ヨカデイ聖書の話し

介護員 倉本 幸一

この四月から望みの門ヨカデイサービスセンターでは「聖書の時間」を毎週月曜日に行っています。はじめ利用者の皆さんは「グレイスホームで毎週日曜礼拝に出ているから、わざわざそんなことやなくてもいいよ。」という感じでした。そんな空気の中、田尻園長が紙芝居をしながらキリスト教のお話しをしたり讃美歌を歌ったりする「聖書の時間」が始まりました。時間は約三〇分〜四十五分、お話しだけだと利用者の皆さんのあくびと居眠りが始まります。そこで紙芝居をしながら話すと皆さんは、絵を見るだけで興味を持って、聞いてくれる様になりました。それから聖書の本を読みたいと言う利用者さんもありました。それでも興味をしめさない利用者さんもありました。

讃美歌を四曲〜六曲、歌ったり、話の間に歌ったり、紙芝居の後に歌ったりし、終りに歌うたいます。かなりの曲を歌うので、歌

の好きな利用者さんは、大きな声で歌いますが、なかなかリズムが取れませんでした。数を歌うと、段々声が出てきて、リズムも合ってきました。利用者さん達は、歌の好きな人、紙芝居を見た人、お話を聞きたい人、聖書を読むのが好きな人達がそれぞれ興味を持つ様になりました。

そのおかげで昼食事の前にも讃美歌をうたっています。

毎週月曜日の聖書の話が早く来ないかなと皆で楽しみにしています。

中核地域生活支援センター 君津ふくしネット

「誰ひとり、見捨てない」

センター長 西山 信男

昨年は、春と秋にNHKテレビで千葉県の試み・中核地域生活支援センター「誰ひとり、見捨てない」、「派遣切り・就労と生活」が何度か放映され、いっきに相談が増えました。それは、二四時間三六五身体制だから対応出来る、精神障害の方からの訴えや、縦割りの福祉では解決できない相談でした。コーディネート員の増員を考えました。



年が明けた今年二月千葉県は、中核事業の委託費を一六％減額する運営要綱を提示しました。当に梯子を外されたようで、一三ある中核センターは、どこも大激震です。しかし各センターを運営する法人は、辞退することなく事業を継続する委託契約を結びました。これは、「誰でも何時でも、どんなことでも相談出来る福祉の相談窓口」が、地域に必要なことを五年の積み重ねで解っていたからです。そして中核地域生活支援センターは、市町村はじめ幾つもの関係機関と連携が出来て、地域から認知されつつあります。

本年度、ミッドナイトミッションのぞみ会では、木下理事長をはじめ皆様に『福祉は、地域づくりから』を十分に理解していただき、委託費減額はあったものの相談件数は増加する中、職員（コーディネーター）を減員することなく、励まし応援して頂き事業に取り組むことが出来ました。心より感謝申し上げます。

君津ふくしネットは現在、常勤四名・非常勤二名の職員体制で、長い・何度も繰り返えられる電話や家族間調整、就労支援、障害者グループホームに関する連絡調整、ホームレスや貧困者の生活支援、引きこもり・発達障害者の家族からの相談など、一つの窓口で簡単に解決出来ない問題に対応しています。今後も発生すると思われる複合困難事に、どのような支援が出来るのか、職員一同は身の引き締まる思いで、毎日の業務に取り組んでいます。

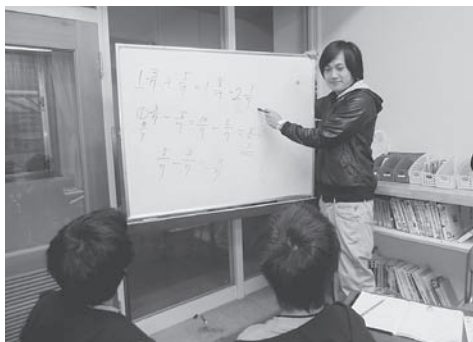
児童養護施設 望みの門かずさの里
保育士となつて

保育士 安藤 嘉将

望みの門にお世話になり早一年が経ちました。私の初めての就職先は高齢者在宅支援課内のデイサービスセンターとなりました。当初は私の専門分野でなく、経験もない未知の世界で、戸惑いの毎日でした。徐々に慣れる中、上司、先輩のご指導により新たな分野での自分を発見することとなり、充実した八カ月となりました。私にとり大切な経験であり福祉に携わる原点となりました。是からもあの時の初心を大切にしたいと思います。

そして今年一月、希望の仕事であったかずさの里に就くことになり、子どもたちとの関わりに胸を膨らませました。反面、児童養護施設で働くことの重さを実感し、不安もつのりました。初め

は右も左も判らず無我夢中の毎日でした。一息つくのと、子どもたちに何をしてあげられるか、何のために自分がいるのか……と情けない自分がいました。そんな中、施設長をはじめ諸先輩方



の熱い語りに勇気をもらいながら、落ち着い

ていきました。日を重ねる中、より責任の重さを感じつつ、かずさの里の職員としての自覚を深めています。子どもたちと過ごす中で、自分に課している点は、一人ひとりときちゃんと向き合った関係を築くことです。親ではないながら、各々の育ちを見守り後押しをする身近で信頼できる大人になることです。容易にできることでなく、また終わりのあるものでない、永遠の課題と言えます。そんな中、日々の暮らしの中で、とりわけ気にかけているのは、子どもたちの生活マナー、基本的な生活習慣です。社会に出る際、困らないようしっかり身につけてほしいと思います。それゆえ「わかってるよ!」の連呼が毎日飛び交いますが、引いてはいけなない真正面での根比べです。また一方では各々の悩みを受け止めることも大切であり、改めて子ども目線での気持ち、感情に考えさせられます。

まだまだ未熟な自分ではありますが、私の言葉掛けや、思いが、子どもたちの心にきちんと届き、育ちの手助けになるよう力をつけたいと思います。

乳児院 望みの門方乳児園

「産まれてきてくれてありがとう」「い

保育士（家庭支援専門相談員）井本 千鶴

現在、方舟乳児園では九名の子どもたちが生活しています。この世に生を受けて僅か数日から数ヶ月間しか経っていないにも関わらず、大変困難な事情を抱えて入園してきた子

どもたちばかりです。開設一年目の昨年は、計一四名の子どもたちが入園し、五名の子どもたちが親元に帰っていくことができました。今年度は、一名は児童養護施設へ、一名は里親さんの元へ巣立って行きました。

千葉県には、県立乳児院を含めて五か所の乳児院があります。五つの園全体で計約九〇名余の子どもたちが、保護者と離れて生活しています。月に一度、県内各乳児院の家庭支援専門相談員や看護師が集まり、乳児院で暮らす子どもたちの生活に関する学習会を開いています。今年度は、「子どもたちとの適切な関わり」をテーマに学習しています。適切な関わりとはどういうものなのか、全国乳児院協議会から出されている「子どもとの適切な関わりチェックリスト」を元に千葉県独自のチェックリストの作成をしています。

チェック項目を見ると、どの項目も全て子育て・養育をするにあたってごく当たり前のことしか書かれていません。しかし、実際子どもたちとの関わりの中で、この「ごく当たり前のこと」を

実践しようとする

と案外難し

かったり、大変

だったりするこ

とがあります。一度に何人もの子どもたちが一緒に泣き出した



どもたちの世話が重なってしまったりする時などは、こちらも気があせってしまいうことがあります。例えば『ダメ、うるさい、あっち行って』等否定的な言葉掛けをしなかったか」という項目では、子どもに注意をする時など、頭では理解していても、つい口から出てしまい、後で「ちょっと言い過ぎちゃったかな」と反省することもあります。チェックリストを活用することで、当たり前だけれど子どもとの関わりの中で「大切なこと」を改めて意識し、職員間でもお互いにチェックし合うことで、子どもと共に生活することの意味を改めて振り返ることが出来ます。

先日研修会で、ある先生から「子どもは、自らの意思と生きる力を持ってこの世に産まれてくる。」というお話を伺いました。子どもは自らの意思で母親と協力し、「産まれたい」と思い、この世に誕生してくること、自ら生きていく力が既に備わっていることを学びました。

私たちは、この仕事を通じて、赤ちゃんが持つその意思と力を応援できる環境づくり、子どもたちが「産まれてきて良かった」と思えるような環境づくりをしなければならぬ、と改めて認識しました。そして、方舟乳児園で出会えた子どもたちに、「産まれてきてくれてありがとう」という想いを伝え続けたいと思います。



編集後記

日増しに寒さを感じるようになり第一待降節を迎えた。今号は巻頭言をUCA都市建築設計事務所の宇野先生に飾って頂いた。折よく有料老人ホーム望みの門ハイムの竣工を間近にして感銘深い玉稿を頂き感謝であった。

さて、本年渡独研修した楽生園の松田生活相談員、かずさの里の小池児童指導員のレポートをどのように読まれたか。読者の所感が求められる。日独子ども家庭アカデミーは日本とドイツを結ぶ若者の交流と同時に彼我の文化を学び、生活の中に生かすことにある。志あるものは英語かドイツ語を学んでほしい。

ヘットカンフ先生をお訪ねした長崎指導員の記事も懐かしく読んだ。

本年は年初より多事多端なスタートであった。運営上のソフト面、ハード面共に各部門の密接な協力の下に格段の進化があった。夫々で法人の一〇大ニュースをあげてみるのも一興。

さて、来年はいかなる展開となるか。本県知事宛に上総湊に七〇名の特養新設申請書を送付した。地域福祉実践の真偽が問われようとしている。

メリークリスマス。そして新年のうえに主の祝福をお祈りいたします。